

親密度の異なる友人に対する自己開示抵抗感に関する検討

三上, 聡美
九州大学大学院人間環境学府

山口, 裕幸
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/15715>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 9, pp.75-81, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

親密度の異なる友人に対する自己開示抵抗感に関する検討¹⁾

三上 聡美 九州大学大学院人間環境学府
山口 裕幸 九州大学大学院人間環境学研究院

A study on hesitation in self-disclosure: The effects of difference of intimacy

Satomi Mikami (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Hiroyuki Yamaguchi (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was to examine what differences were found in hesitation of self-disclosure between to the best friend and an ordinary friend. As the first step, free description survey about the experiences of hesitation of self-disclosure was conducted. The questionnaire was developed on the basis of the results. 220 students of a university, a junior college, and a vocational school answered the questionnaire. The results showed that the difference of the degrees of hesitation of self-disclosure was not seen depend on the degree of intimacy with friends. It was suggested that structures of hesitation of self-disclosure differ by each.

Keywords: self-disclosure, hesitation, intimacy with friends

問題と目的

本研究の目的は、青年期における個人の自己開示抵抗感が、友人に対する親密度の違いによってどのように異なるのかを検討することにある。

本研究で検討する自己開示抵抗感とは、遠藤（1994）の定義している「開示抵抗感」に基づき、開示者側が自己開示過程で認知する抵抗感に着目したものである。開示抵抗感には、対自的側面と対他的側面があることが見出されている（遠藤，1995）。対自的側面とは、開示内容への評価に関する抵抗感であり、例えば、開示内容が一時的で些細なことであり、一過性であるという考えや、相手に伝えても内容が特殊で分ってもらえないだろうという不安などが含まれる。また、対他的側面では、そのことを自己開示すると、それまで築き上げてきたお互いの関係にマイナスの質的な変化を生じさせるのではないかと不安や懸念が中核とされている。

この対自的側面と対他的側面については、自尊感情の高・低ともに、対他的要因が影響する（亀田，2003）という知見や、否定的な内容の自己開示を行うことで自分の弱点をさらし、相手に対する相対的な地位を低めること（Hatfield, 1984）などの研究が重ねられている。

一方、根本・西尾（2001）は、自己開示を抑制する要因について、相手の反応に不安を感じて自己開示を抑制

するのではなく、お互いに深く知り合うことにかえって傷つけあうことを恐れる心理により、自己開示が抑制されると述べている。これは、遠藤（1995）らが述べている対自・対他的側面が開示者自身に着目した時の自己開示抵抗感であるのに対し、開示者と被開示者との相互行為に着目したものと考えられる。

従来の自己開示研究においては、人間関係を築く上で必要な行為となし、感情浄化作用など身体的・精神的健康上においても重要な役割を果たすとされている（安藤，1986）。しかし、人は常に自身について他者に表出しているわけではない。自己開示を行うことへの抵抗を感じた経験のある人は多いはずである。また、自己開示を抑制する行為は、自己開示行為同様、必要な行為であると思われる。だが、Altman & Taylor（1973）の社会的浸透理論といった自己開示行為の理由についての研究は数多くあるものの、自己開示における抵抗感の理由についての研究は数少ない。この自己開示抵抗感こそ、自己開示を定義する上で重要な概念であると考えられる。

Altman & Taylor（1973）は、自己開示は親密性の大きい他者になされるものであると指摘している。しかし他方で、Jourard（1971岡堂訳，1974）は、自分自身を「重要な他者」に開示するほど、恐ろしい経験はないと言及している。青年期において、友人は「重要な他者」であると同時に、自己概念に大きな影響をもたらす。両者の知見を比較して考えると、開示抵抗感とは、相手に分かってもらいたいという心理と、相手からの拒絶を恐れる心理が拮抗することにより生じるものであると考えら

¹⁾ 本論文は長崎純心大学人文学部に提出した卒業論文を再分析及び加筆修正したものである。また、本論文は日本社会心理学会第48回大会にて発表された。

れる。このようなアンビバレントな心理は、友人と親しくなればなるほど大きくなるものであろう。よって、対人関係の親密さのレベルにおいて開示抵抗感存在すると考えられる。親密性の大きい他者に対して開示量が多くなる知見を自己開示的側面からのものであるとするならば、重要な他者への開示抵抗感の強さを自己開示抵抗感からの側面として捉えることができるかもしれない。親密性の高い親友に対するアンビバレントが大きくなるということは、多くの抵抗要因を抱いているということが予想される。

そこで、本研究では以下の仮説を立て、開示相手を最も親しい友人と顔見知り程度の2者を設定し、比較検討しながら自己開示することへの抵抗の要因を探ることとした。

仮説:

仮説1 友人に対して自己開示するか否かを判断するとき、開示内容そのものに対する不安と、友人との対人関係崩壊への不安の2種類の不安による開示抵抗感を抱くだろう。

仮説2 上記2種類の不安は、いずれも友人との親密性が高いほど強くなり、その結果、自己開示抵抗感も強くなるだろう。

第一研究

目的

本調査を行うにあたって、青年期にあたる学生がどのようなことにおいて自己開示抵抗感を抱くのかを知ることがを目的とした。

方法

調査対象者 大学・短大・専門学校の学生30名を調査の対象とした。

質問紙構成 質問紙の冒頭において、“今まで、人との会話場面において、自分の事を伝えることが嫌だと抵抗を抱くことがあったと思われます。そのことについて、記述できる限りでよいですので以下の質問にお答えください。”と教示を行い、以下の5項目において自由記述で回答させた。“1. 抵抗のある内容とはどのようなことですか。具体的にお書きください”，“2. 1の質問項目に対してそれはどんな時ですか”，“3. 抵抗を感じる主な相手は誰ですか”，“4. なぜ、そのような抵抗感を抱くと思いますか”，“5. 抵抗を感じた後、その内容を誰かに話しますか。それは抵抗を感じる相手ですか、それとも違う相手ですか”と教示し、回収法にて調査を行った。

結果 自由記述の結果より、それぞれの項目において内容を分類した。

1. 「抵抗のある内容」: 25項目の回答が得られた。①自分の内面的な部分について(現在・過去)、②自分の学

力的なことについて、③対人関係、にまとめた。“本当の自分について”や“自分の恥ずかしい失敗話、ネガティブなこと”など、自身の価値観や観念が含まれるようなことに関する内容についての項目があげられた。

2. 「抵抗を感じる状況」: 30項目の回答が得られた。①初対面、②普段の会話場面、③対話相手との親密さ、④対話相手との立場上の違い、⑤対話相手からの質問場面、⑥自分の精神状態、⑦メール・電話場面にまとめた。状況としては、様々な多くの場面において抵抗が生じていることが分かった。

3. 「抵抗を感じる主な相手」: 25項目の回答が得られた。①初対面の人、②家族、③友人、④親密性の低い人、⑤異性、⑥立場の異なる相手、⑦嫌悪感を抱いている相手にまとめた。また、これらに入りきれなかったものについて⑧その他として分類した。これより、特定の他者のみに抵抗を感じるのではなく、開示者周囲の複数の他者に対して抵抗を感じていることが分かった。

4. 「抵抗感を抱く理由」: 42項目の回答が得られた。①話すことで相手からマイナスの評価を受けることへの不安、②話すこと自体に抵抗がある、③相手に対する不信、④相手への配慮、⑤相手との親密さ、⑥関係性の特性、⑦時間的事由、⑧関係の継続性、⑨開示手段にまとめた。これらより、多面的理由について抵抗が生じるということが分かった。

5. 「抵抗を感じた後にその内容を誰かに話すか」: 話す場合には、主に家族や仲のよい相手などの回答が得られた。話さない場合は、自分の中で考えるとの回答が得られた。

第二研究

目的

第一調査の「抵抗を感じる状況」、「抵抗を感じる主な相手」の項目において得られた回答の“友人”の“親密性”に着目し、本研究の目的である自己開示抵抗感が、友人に対する親密度の違いによってどのように異なるのかについての検討を行うこととした。また、「抵抗感を抱く理由」で確認された結果を参考にし、質問紙を作成した。

調査対象者

大学・短大・専門学校の学生220名を対象に、回収法にて質問紙調査を行った。回収した質問紙のうち、記入漏れを除く120名を分析対象とした(有効回答率88.9%)。

質問紙構成 質問紙は以下の2つによって構成した。

自己開示抵抗経験 “あなたは今までに、自分のことについて人に話すのにどのくらい抵抗を感じたことがありますか”と教示をし、“全然ない(1点)”から“頻繁にある(5点)”までの5件法で回答を求めた。なお、得点

が高いほど自己開示についての抵抗経験が多くあるように得点化した。

自己開示抵抗要因 自己開示抵抗感質問紙（遠藤，1995），自己開示抑制要因尺度（榎本，1997）と予備調査結果を参考にして36項目を作成した。“あなたが自分のことについて話すときに抵抗を感じる場合，それはどんな理由からですか。以下の内容から当てはまる項目すべての数字に○をつけてください”と教示した。最も親しい友人と顔見知り程度の友人2者を設定し，それぞれについて回答を求めた。

また，順序効果やキャリー・オーバー効果を相殺するために，友人設定を入れ替え，カウンターバランスをとる手続きを行い，質問紙の最後にフェイスシートを設けた。

結果と考察

抵抗経験の頻度

“1”，“2”と回答した者を“抵抗なし”，“3”と回答した者を“どちらでもない”，“4”，“5”と回答した者を“抵抗あり”とした。

抵抗経験においてどのような偏りがみられるのかを知るために χ^2 検定を行った。その結果をFig.1に示す。

検定の結果，有意な人数比率の偏りがみられた（ $\chi^2 = 187.09$, $df=2$, $p<.01$ ）。“抵抗なし”が18人，“どちらでもない”が19人，“抵抗あり”が83人であった。これにより，自己開示状況において抵抗を感じた経験がある人が半数以上おり，自己開示の際に抵抗が生じることがあるということが示唆された。

自己開示抵抗要因の分析

自己開示抵抗要因について，開示対象者によって偏りの違いがあるのかを検討するためにFisherの直接確率計算法を行った。Table 1において，自己開示抵抗要因の

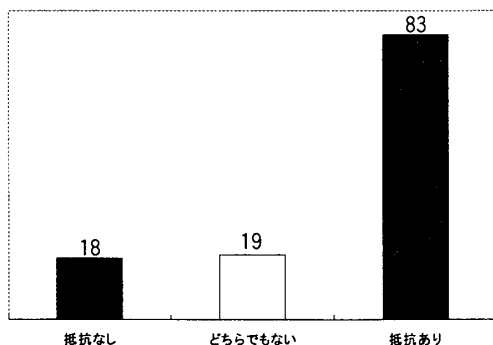


Fig.1 抵抗経験の人数

各項目内容と，最も親しい友人（親友），顔見知り程度の友人（顔見知り）それぞれにおいて選択者数，Fisherの直接確率計算法による友人間の検定結果を示す。

親友よりも顔見知り程度の友人に対して有意に高かった開示抵抗要因の項目は，“13. 自分の心を許していない相手だから”，“20. 別に仲良くなったり自分のことを理解してもらおうと思わない”，“32. 改めて真剣に胸のうちの明かすような雰囲気ではない”，“34. お互いに相手のことをそんなに深く知っている必要はない”，“35. 楽しい間柄でいたい”など18項目であった。逆に，顔見知りより親友の方が有意に高かったものは，“4. 話すことで聞いてくれた人との関係を崩したくない”，“19. 相手の重荷になるんじゃないかと思う”，“23. 解決のしようがなく，どうしようもない”の3項目であった。

これより，最も親しい友人に対しての開示抵抗感，開示することによりこれまで築いてきた友人関係が左右されることへの不安からもたらされる感情的な動機より生じていると考えられる。一方，顔見知り程度の友人に対しては，一定以上の自己開示をすることへの抵抗感，つまり，規範性の動機から生じるものであると考えられる。

次に，自己開示抵抗要因の各項目がどのようなまとまりをもっているのかを検討するため，最も親しい友人，顔見知り程度の友人をそれぞれ1ケースとみなし， $36 \times 2 = 72$ ケースとして，数量化Ⅲ類に基づく解析を行った。第Ⅲ軸までを求め，解釈可能な軸として第Ⅱ軸，第Ⅲ軸を採用した。第Ⅱ軸は公的視点（+）—私的視点（-），第Ⅲ軸は言動レベル（+）—心理レベル（-）の軸と解釈した（Fig.2）。更に，カテゴリスコアを第Ⅱ，第Ⅲ軸による座標平面での各象限ごとに分類し，第1象限を“3. 相手が内容をきちんと理解してくれるか不安”，“15. 不安を人に示したくないという気持ち”，“24. 内容が些細なことで話すまでもない”など開示内容を相手に理解してもらえるかどうか不安などからくる抵抗要因と考えられ，“評価懸念”と解釈した。第2象限を“10. まわりに気をつかう”，“12. 話すとき尾を引いて立ち直れない”，“14. 自分に自信がない”など開示すること自体の懸念などの抵抗要因と考えられ，“伝達躊躇”と解釈した。第3象限は，“6. 自分に対する嫌悪感やコンプレックス，劣等感など自己否定的な感情を相手に示すことになる”，“9. 話す状況がよくない”，“11. 信用できる相手か分からない”など話す際の内容や場面の状況を考慮することから抵抗要因と考えられ“私見固持”，第4象限を“1. 話すことで相手の自分に対するイメージを変えたくない”，“2. 話すことによって相手に嫌われたり，マイナスの評価を自分が受けるかもしれない”，“4. 話すことで聞いてくれた人との関係を壊したくない”など今の相手との関係より変化を避けることからの抵抗要因

Table 1
自己開示抵抗要因の項目内容と選択者数、友人間の検定結果（複数回答）

項目内容	選択者数		友人差	Exact Test
	親友 人数 (%)	顔見知り 人数 (%)		
4. 話すことで聞いてくれた人との関係を崩したくない	56 (46.6)	34 (28.3)	親友>顔見知り**	
19. 相手の重荷になるんじゃないかと思う	57 (47.5)	24 (20.0)	親友>顔見知り**	
23. 解決のしようがなく、どうしようもない	25 (20.8)	14 (11.7)	親友>顔見知り*	
1. 話すことで相手の自分に対するイメージを変えたくない	39 (32.5)	49 (40.8)		
2. 話すことによって相手に嫌われたり、マイナスの評価を自分が受けるかもしれない	66 (55.0)	68 (56.7)		
3. 相手が内容をきちんと理解してくれるか不安である	42 (35.0)	49 (40.8)		
7. 話すことで漠然としていた不安を、自分自身がそうであると認めることになる	19 (15.8)	15 (12.5)		
8. もともと相談事を人にもちかけたくない性格	33 (27.5)	37 (30.8)		
12. 話すとき尾を引いて立ち直れない	9 (7.5)	10 (8.3)		
14. 自分に自身がない	40 (33.3)	35 (29.2)		
15. 不安を人に示したくないという気持ち	27 (22.5)	29 (24.2)		
16. 人に心を開くのに時間がかかる	40 (33.3)	36 (30.0)		
21. 愚痴っぽく聞こえてしまう	42 (35.9)	32 (26.7)		
24. 内容が些細なことで話すまでもない	13 (10.8)	19 (15.8)		
29. 意見が対立するようなことは避けたい	29 (24.2)	24 (20.0)		
30. つまらないことを深刻に考えていると思われるのがいや	16 (13.3)	24 (20.0)		
33. 自分の気持ちや考えは誰に言っても分かってもらえない	9 (7.5)	10 (8.3)		
36. へたに深入りして傷つけたり傷つけられたりしたくない	35 (29.2)	41 (34.2)		
5. 他人の気付いていなかった自分の弱点を知らせることになる	15 (12.5)	29 (24.2)	親友<顔見知り*	
6. 自分に対する嫌悪感やコンプレックス、劣等感など自己否定的な感情を相手に示すことになる	28 (23.3)	44 (36.7)	親友<顔見知り*	
9. 話す状況がよくない	11 (9.2)	52 (43.3)	親友<顔見知り**	
10. まわりに気をつかう	36 (30.0)	68 (56.7)	親友<顔見知り**	
11. 信用できる相手か分からない	19 (15.8)	81 (67.5)	親友<顔見知り**	
13. 自分の心を許していない相手だから	12 (10.0)	77 (64.2)	親友<顔見知り**	
17. 話が他の人に広がると嫌である	40 (33.3)	72 (60.0)	親友<顔見知り**	
18. 話す必要はない	18 (15.0)	86 (71.7)	親友<顔見知り**	
20. 別に仲良くなったり自分のことを理解してもらおうと思わない	5 (4.2)	34 (28.3)	親友<顔見知り**	
22. 内容が自分と友達や、周囲の人とも関係する	34 (28.3)	48 (40.0)	親友<顔見知り*	
25. 一時的な悩みにすぎない	17 (14.1)	39 (32.5)	親友<顔見知り**	
26. 内容を人に理解してもらいたい	20 (16.6)	34 (28.3)	親友<顔見知り*	
27. 相手が自分の話を聞いてくれるかどうか分からない	18 (15.0)	44 (36.7)	親友<顔見知り**	
28. 自分と相手とでは、ものの見方・考え方は違っている	29 (24.2)	43 (35.8)	親友<顔見知り*	
31. 心の中をのぞかれるのは恥ずかしい	21 (17.5)	35 (29.2)	親友<顔見知り*	
32. 改めて真剣に胸のうちの明かすような雰囲気ではない	9 (7.5)	42 (35.0)	親友<顔見知り**	
34. お互いに相手のことをそんなに深く知っている必要はない	4 (3.3)	76 (63.3)	親友<顔見知り**	
35. あまり重くならず楽しい間柄でいたい	16 (13.3)	62 (51.7)	親友<顔見知り**	
調査対象者数	120 (100)	120 (100)		

* $p < .05$ ** $p < .01$

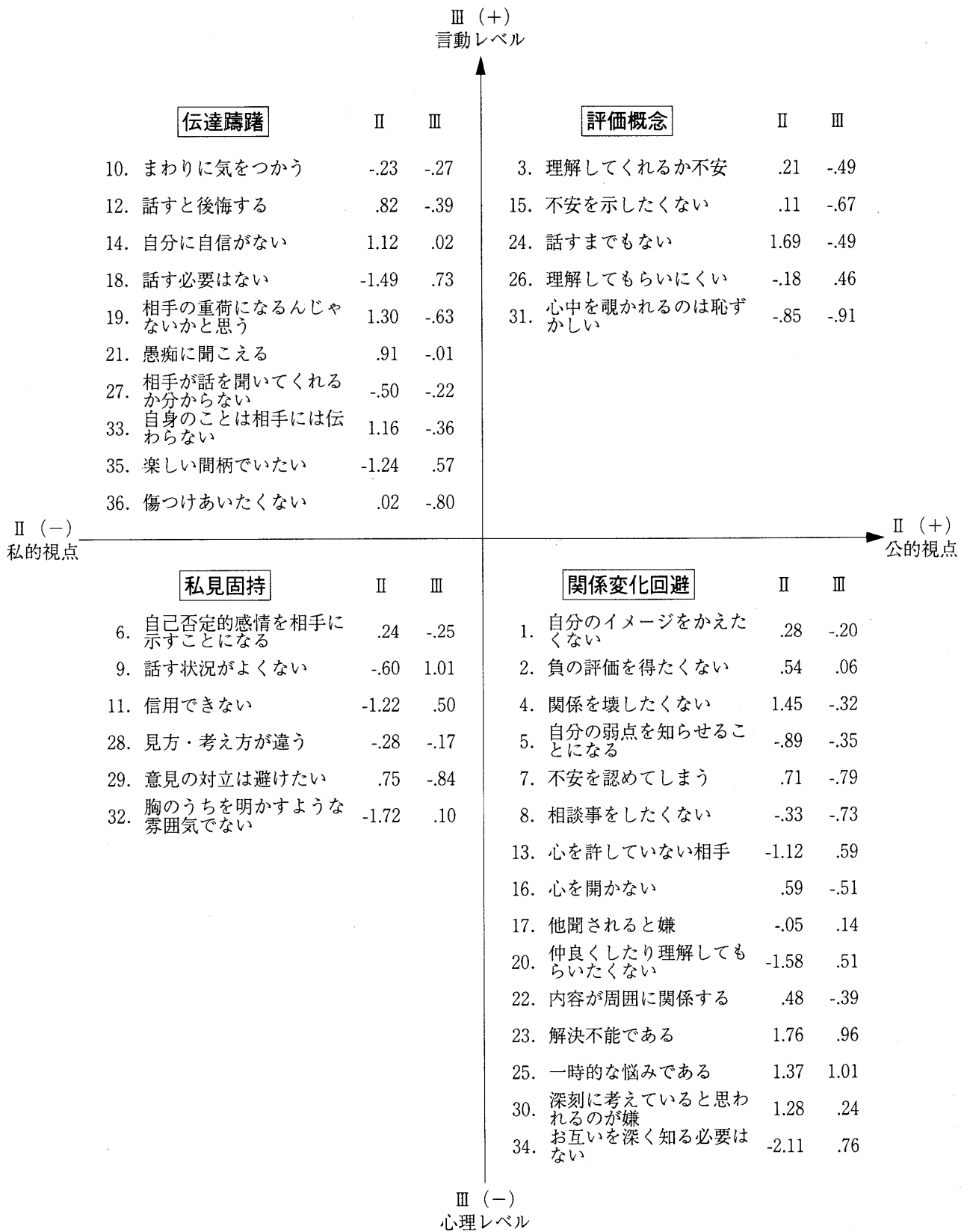


Fig.2 自己開示抵抗要因の項目とカテゴリスコア

Table 2
抵抗経験と友人間による各得点

抵抗友人	抵抗なし		どちらでもない		抵抗あり	
	親友	顔見知り	親友	顔見知り	親友	顔見知り
評価懸念	1.22 (1.31)	1.61 (1.24)	0.84 (1.07)	1.05 (0.97)	1.02 (1.02)	1.41 (1.20)
伝達躊躇	2.28 (1.67)	3.56 (1.95)	1.74 (1.37)	3.47 (1.90)	2.48 (1.99)	3.40 (1.81)
私見固持	1.22 (1.31)	2.44 (1.42)	0.74 (0.99)	2.42 (1.57)	1.07 (1.12)	2.36 (1.53)
関係変化回避	4.28 (2.22)	5.72 (2.70)	2.68 (1.77)	5.05 (2.93)	3.53 (2.30)	5.46 (2.76)

上段：平均値，下段：標準偏差

と考えられ，“関係変化回避”に基づく自己開示抵抗要因であると解釈した。

遠藤（1995）は，自己開示に抵抗を感じる原因を二つに分けてあげている。一つは対自的側面であり，対自内容への評価に関する抵抗感である。もう一つは，対他的側面であり，そのことを自己開示すると，それまで築き上げてきたお互いの関係にマイナスの質的な変化を生じさせるのではないかという不安や懸念が主な中核となっている。本研究において数量化Ⅲ類で得られた結果をこれに当てはめてみると，“伝達躊躇”と“私見固持”が対自的側面にあたり，“評価懸念”と“関係変化回避”が対他的側面に当てはめられると考えられる。これらの結果は，先行研究の結果（遠藤，1995；片山，1996；松下，2005）とほぼ一致していると考えられる。しかし，この点においては，先行研究，本研究ともに，質問項目においての若干の違いもある。例えば，松下（2005）は，他者からの否定的な評価を懸念しているものを“他者評価懸念因子”と命名しているが，本研究では，“1. 話すことで相手の自分に対するイメージを変えたくない”など相手からの評価を懸念することに関する項目は，“2. 話すことによって相手に嫌われたり，マイナスの評価を自分が受けるかもしれない”，“4. 話すことで聞いてくれた人との関係を壊したくない”というような，話すことによって相手との関係に変化をもたらすことを懸念する項目と同一の象限として見出されたため“関係変化回避”と命名した。このような点を含め，対自・対他的要因についてより詳細に検討する必要があると考えられる。

自己開示抵抗要因と抵抗経験との関係

抵抗経験の頻度や自己開示対象者によって自己開示抵抗感に関係に差がみられるのかを検討するために，抵抗

経験（抵抗なし・どちらでもない・抵抗あり）の3水準×友人（最も親しい友人・顔見知り程度の友人）の2水準を独立変数，先の数量化Ⅲ類で得られた抵抗要因の分類（評価懸念・伝達躊躇・私見固持・関係変化回避）の4水準を従属変数とした2要因の分散分析を行った。なお，抵抗なし・親友，顔見知り群は18名，どちらでもない・親友，顔見知り群は19名，抵抗あり・親友，顔見知り群は83名であった。また，抵抗経験において，“1”，“2”と回答した者を“抵抗なし”，“3”と回答したものを“どちらでもない”，“4”，“5”と回答した者を“抵抗あり”とした。抵抗経験と友人間による各得点をTable 2に示す。

分散分析の結果，交互作用・主効果はいずれにおいてもみられなかった。有意な結果がみられなかった原因として，本調査で抵抗経験についての回答を求めるときに開示対象者を限定しなかったことが考えられる。開示対象者を親友と顔見知りに限定した場合，本研究で目的としている親友と顔見知りにおいての比較検討をより詳細に考察を深められたのではないかと推測される。しかし一方で，親友と顔見知り程度の友人の両方に対して抵抗経験が生じているということは否めない。また，調査対象者が友人との接触頻度が高い学生であるということも有意な結果が得られなかった一因としてもとらえられる。今後，このような原因を考慮しながら研究を深める必要があると考えられる。

総合考察

本研究では，学生が最も親しい友人と顔見知り程度の友人に対して抱く自己開示抵抗感について比較検討を行った。

結果は、青年期において重要な他者とされる友人に対して開示相手との関係を悪くすることへの懸念と捉えられるような“評価懸念”や“関係変化回避”といった対他的側面、開示内容や場面・状況などから開示抵抗が生じるという“伝達躊躇”や“私見固持”といったような対自的側面の構造を持った自己開示への抵抗感が生じるというものを示唆するものであった。これは、遠藤(1995)の定義している開示抵抗感の構造と整合している。

よって、仮説1のとおり、友人への自己開示を行うかの判断は、開示内容自体に対する不安と、友人との関係崩壊への不安が開示抵抗感に強く影響を及ぼすということが明らかとなった。また、本研究において、最も親しい友人と顔見知り程度の友人の双方に対して開示抵抗感が生じることが示された。大学生において、開示相手として最も選ばれるのは、友人であることが先行研究でも報告されているが(榎本, 1997)、親しさを求めつつも、そうできないという拮抗した感情が働いているのではないだろうかと考えられる。

一方で、親密性の強い親友に対する方が顔見知り程度の友人に対するよりも開示抵抗への要因を多く抱くことが予想されたが、本研究ではそのような知見を得ることはできず、仮説2は立証されなかった。これは、親密性の低さ自体が、自己開示の抵抗要因となる片山(1996)や亀田(2003)の研究と整合することとなり、本研究の予想とは異なるものとなる。予想につながらなかった理由の一つとして、本研究の開示対象者が友人を得やすい環境にあり、また頻繁に接触できる学生であったため、親密性のズレが小さかったのではないかと考えられる。もう一方で、特定の他者である開示対象者を友人に限ったことについての問題点があげられる。この年代では、友人が重要な他者ではあるが、個人によっては友人よりも、親や兄弟などに多く開示するという可能性もあり、また、開示抵抗感が生じるということも考えられる。また、開示状況の環境によっても自己開示に対する抵抗感が異なることも考えられるので、その点を検討する必要がある。

自己開示に関する研究は数多くなされてきたものの、その抵抗感に関する実証的検討はまだ十分とはいえない。

日常生活の自己開示場面において、抵抗感を覚える経験は頻繁に生じていると考えられるため、今後の展望への可能性が広がると推測される。本研究の課題点と共に、更なる詳細検討を進めていきたい。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D.A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- 安藤清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要「論集」, **36**, 167-199.
- 遠藤公久 (1994). 自己開示における抵抗感の構造に関する検討 筑波大学心理学研究, **16**, 911-97.
- 遠藤公久 (1995). 自己開示における抵抗感の構造 カウンセリング研究, **28**, 47-57.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学研究 北大路書房
- Hatfield, E. (1984). The dangers of intimacy. In V. Derlega (Ed.), *Communication, intimacy, and close relationships*. New York: Academic Press. Pp.207-220.
- Jourard, S.M. (1971). *The transparent self*. New York: Van Nostrand Reinhold. (岡堂哲雄訳 (1974). 透明なる自己 誠信書房)
- 亀田佐和子 (2003). 否定的内容の自己開示と自尊感情および開示抵抗感の関連性 早稲田大学大学院教育学研究科起用別冊, **10**(2), 157-168.
- 片山美由紀 (1996). 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, **67**(5), 351-358.
- 熊野美智子 (2002). 自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違 教育心理学研究, **50**(4), 56-464.
- 松下智子 (2005). ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究 心理学研究, **76**(5), 480-485.
- 根本橋夫・西尾佳奈 (2001). 大学における親友に対する女子大学生の自己開示 東京家政学院大学紀要, **41**, 197-203.
- 和田 実 (1995). 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, **11**(1), 11-17.